

『おくのほそ道』の教材的価値について

——中学生に対して何を教えてゆくべきか——

石 塚 修

『おくのほそ道』は、俳諧師松尾芭蕉が門人の河合曾良と共に、元禄2年(1689年)3月から9月にかけて、全行程600里に及ぶ、東北地方を中心とした旅について記した紀行文である。その内容の詳細については、ここで改めて述べるまでもない程、日本における紀行文の代表的作品として、広く世に知られている作品でもある。現在の中学校・高等学校にあっても、必ずといってよい位、古典教材として取り上げられる作品でもあり、中等教育にあつての古典教材として大切な位置にある作品といつても過言ではないだろう。

しかし、その教材としての価値についての検討が、国語教育という見地からなされてきたかという、甚だ疑問である。実際、『国語年鑑』や『国文学年鑑』⁽¹⁾の国語教育の論文目録を検索しても、近年そこに注目したと思われるものは見受けることができない。本稿では、特に中学校の教材としての『おくのほそ道』の扱われ方がどのようになっているのか、また、その扱い方が本当に『おくのほそ道』の本質を生徒に伝えているのかどうかを検討してゆこうと思う。

現行の中学校の教科書における『おくのほそ道』の採録状況は次のようである。

東京書籍「新しい国語」3 (「発端」⁽²⁾「平泉」補助文つき)

学校図書「中学校国語」3 (「発端」「平泉」「立石寺」)

句のみ「五月雨を一」「荒海や一」「蛤の一」)

三省堂「現代の国語」3 (「発端」「旅立ち」「平泉」)

教育出版「中学国語」3 (「発端」「平泉」「立石寺」)

光村図書「国語」3 (「発端」「平泉」⁽³⁾)

以上の5社が、『おくのほそ道』を採用している。因みに、高等学校「国語I」での扱い方も見てみると、

「発端」(3社)、「平泉」(4社)、「白河の関」「立石寺」「象潟」「金沢」(各1社)

という状況で、中学校の教材と大差なく、採用されている部分が非常に固定化してしまっていることに気付かされる。

このような固定化された教材の選定のされ方は、一体どこから生じてきているのだろうか。『中学校国語教科書内容索引 昭和24~61年度』⁽⁴⁾によって変遷を辿ってみると、次のようになる。

昭和26年⁽⁴⁾ 光村図書 「発端」「那須野」 頼原退蔵解説文つき(昭和29,30)

昭和29年 愛育社 「発端」「平泉」⁽⁵⁾

二葉社 「那須野」「立石寺」

昭和32年	教育図書	「尿前の関」「最上川」
昭和33年	開隆堂	「平泉」
	日本書籍	荻原井泉水「奥の細道をたずねて」として「平泉」の原文を含む。 (昭36, 40)
昭和36年	光村図書	三好達治「夏草」として「発端」の原文を含む(昭和41, 44)
昭和40年	大阪書籍 ⁶⁾	
昭和46年	日本書籍	「平泉」(昭和49, 52)
	東京書籍	「立石寺」(昭49)
	三省堂	「発端」「旅立ち」「白河の関」「須賀川」「平泉」「市振」(昭和49)
	学校図書	加藤楸邨『『奥の細道』紀行』として「発端」の原文を含む。(昭和49)
	光村図書	加藤楸邨『『奥の細道』を尋ねて』として「発端」「千住」「平泉」の原文の一部を含む。(昭和49)
昭和52年	学校図書	「発端」「平泉」「立石寺」 句のみ「五月雨を一」「荒海や一」「蛤の一」(昭55, 58)
	光村図書	「発端」「平泉」(~「光堂」まで)(昭55, 58)
	東京書籍	「発端」「平泉」(補充文つき)(昭55, 58)
	三省堂	「発端」「旅立ち」「平泉」(昭55, 58)
	教育出版	白井吉見「芭蕉の旅と俳句」として「発端」の原文含む。
昭和55年	教育出版	「発端」「平泉」「立石寺」(昭58)

以上のように、『おくのほそ道』の扱われ方の推移をみてくると、昭和52年を一つの境目としていることに気付く。その原因について、「中学校国語指導書」の解説を検討してみると、考えてゆこうと思う。

昭和34年⁷⁾ なお、古典の学習についても、他の読み物との調和を考えた上で、適当な時間をとって、基本的なものに触れさせて、古典に対する関心をもたせるようにする。(第3章第3節)

昭和45年⁸⁾ 古典指導のねらいは、中学校においては古典として価値のある古文や漢文に親しませ、興味、関心をもたせ、これらを理解する基礎を養うのである。……ここでいう「基本的な古典」とは、国民的教養として身につけておくのが望ましいもののうち、特に中学校生徒にふさわしいものを意味しているのであって、……これらを具体的な作品の面からみると、随筆、紀行としては、枕草子、徒然草、奥の細道など……(第2章第3節)

昭和53年⁹⁾ 「古典への入門段階にある生徒にとって、何が親しみやすく、どんな関心を深めていけるか、また、入門段階の学習としてどんな効果を上げられるか、などの立場から考える必要がある。その時、文語文のもつリズムが感じ取れ、暗誦や朗

読にふさわしいものなどを観点に加えることも、古典指導のねらいを達成する一つの方法であろう。(第4章第2節)

「中学校指導書」の流れは以上ようになっていく。ここで、注目すべきは、昭和45年の「指導書」に具体的に『奥の細道』の名が挙げられていることである。また、「読み物」的な扱いから、原文そのものに触れさせてゆこうとする指導の方向もこの辺りから生じてきているようである。昭和53年も、昭和43年を踏襲しつつ、「文語文のリズム」に注目して、暗誦、音読の重視が唱えられている。このような経緯の中で、『おくのほそ道』が、現在のような形で、中学校教材として採録されるようになってきたといえるのであろう。それにしても、初期の頃との比較をしても、現在の扱われ方は、余りにも画一化しすぎているとは言えないだろうか。しかも、高等学校の「国語Ⅰ」との比較をしてみても、重複しているのは、少々、軽々に過ぎるのではないだろうか。溯ってみて、「古典Ⅰ乙」「古典Ⅱ乙」における扱われ方も同様であった。昭和38年から昭和47年の間に採用された状況を『高等学校国語科指導資料教材と指導』⁽⁴⁰⁾でみると、

「発端」22 「平泉」22 「草加」16 「象潟」14 「松嶋」13 「白河の関」「立石寺」10
(全22社中)

という状況であり、中学校と同様に固定化してしまっていることがわかる。

このように、『おくのほそ道』の教材としての扱われ方をふり返ってみると、昭和52年を一つの契機としていることが判る。そして、次第に基礎基本の重視が叫ばれてゆく中、「旅立ち」「平泉」の2章段への画一化が進んできたということができよう。しかし、このような画一化は、本当に、中学生に対して『おくのほそ道』を教えてゆく上での正しい選択の上に立っているのだろうか。しかも、高等学校の教材とも重複してしまっている状況などは、中学校の立場のみならず、高等学校の側からも再考されて然るべきであろうと思う。

教科書がどのような章段を採用しようとするか、実際の現場で、他の部分も個々の教師の裁量によって広く扱われていけば、何らの支障は無いであろうとする批判は当然であろうかと思う。実際の現場の実践の中で、『おくのほそ道』はどのように扱われているかを次に見てゆくこととする。

『作品別 文学教育実践史事典』⁽⁴¹⁾によると、『おくのほそ道』のこれまでの実践は、

ア. 『おくのほそ道』のある段落を使っての一般的な授業。

イ. 芭蕉がなぜ「平泉」へ来たのかを、三連句（「夏草や～」 「卯の花に～」 「五月雨の～」）のつけぐあいから読みとらせる指導。

ウ. 主題単元学習として「漂泊の心」を読みとらせる指導。

の3つに分類できるとする。

しかし、残念ながら、同書のいくつかの実践例を見ても、先の画一化を批判するような例はなかった。教科書以外を教材として実践した例としては、安井奨栄氏の「最上川」⁽⁴²⁾の例と、久松美紀子氏の⁽⁴³⁾『出発まで』（「発端」筆者注）『那須』『立石寺』がふさわしい中学校古典教材であるとの指摘が紹介されているのみであった。『古典の教え方 第2巻 日記・紀行・随筆編』に見られる荒谷浩氏の実践例⁽⁴⁴⁾は、「平泉」を教材とはしながらも、その前段階として、『おくの

ほそ道』の教材化するために10の観点を設けて、『平泉』に盛られていない他の内容は、別の機会にぜひ触れたいものである。」と指摘していることは、注目に値するものであった。最近見られた実践例としては、中野徹也氏の『曾良旅日記』（『曾良随行日記』筆者注）と『おくのほそ道』との比較による実践¹⁵が見られるが、これも「平泉」を中心とした授業例であった。

以上のように、実践例を概観してみても、教科書に採録されている範囲内での教材による実践の域にとどまるものばかりであった。そして、このことは、中学校の授業にあっては、「発端」 「平泉」を中心とする授業がなされていることを示していると思う。そのような教材選びの実態は、はたして、『おくのほそ道』を中学生に教えてゆく時、有効であったといえるのだろうか。次に、そのことについて検証してゆきたい。

現行の中学校教科書の多くは、『おくのほそ道』を教材とした時に、一体、何を教材のねらいとしているのだろうか。現行の中学校教科書の指導資料から読みとってみることとする。

- ・東京書籍（教材採録の意図）ここに取り上げる「奥の細道」は単に元禄文学の傑作として評価されるだけではなく、旅と人生という普遍のテーマを負う作品として、現代の我々とも強くつながるものがある。夢多い青春前期「山のあなた」をめざし、冒険の二字にあこがれている学習者の心を芭蕉の紀行の中に同調させたい。
- ・学校図書（目標）人生を旅と見、旅の中に人生と芸術を鍛え、磨こうとした俳諧文学の完成者、松尾芭蕉の優れた紀行文を読んで、自然の中に人間と自己を見つめる作者の文学精神を読み取らせる。
- ・三省堂（「学習のために」の解説と扱い方）1. 芭蕉は旅をどのようなものとして考えていたか、書き出しの部分から読み取ってみよう。（解説）芭蕉にとって、旅は写実の文学（俳諧）を窮めるためのものであった。
- ・教育出版（教材価値）まさに「菰かぶるべき」覚悟の芭蕉の旅には、当然死が予想されていたはずである。
- ・光村図書（旅の目的）の参考に尾形尙・角川文庫版「新訂 おくのほそ道」解説を引用している。

以上のような扱い方となっている。よく、指導資料を教材研究の際に用いるようでは教師としての資質が問われるというような批判の声が現場ではよくあるので、その批判の対象を以て、現場の「おくのほそ道」の捉え方とするのには、疑義もあろうかと思う。しかし、そうした批判者の人々とても、「おくのほそ道」の、ある意図があつてか否か判らないような画一化された教材を教えることに甘んじているとすれば、同様の見方によってこの教材を認識していると言われても仕方ないことと思われる。

一覽しても気付くことと思うが、『おくのほそ道』の旅は、教科書の視点に立つと、「人生は旅である」という辺りに、その目的を持ってゆこうとしているように思われる。芭蕉自身も、「旅立ち」に「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」と書き初めていることから、その「人生は旅である」の言い古された比喻は、あながちに否定出来ないかも知れないけれど

も、中学校3年生に、本当に理解され得るものかどうかという、甚だ疑わしいと思う。しかも、多くの指導資料の書きぶりが、あたかも、芭蕉の元禄2年の旅に際しての即時の心境を『おくのほそ道』で描いているかのように読めるのも、少々腑に落ちない。『おくのほそ道』は、井本農一氏⁴⁰が推測するように、「元禄二年の秋、旅を了えてからやがて腹案を練って、その後何度も稿を改めたものであろうと推測される。現在のような形になったのは、旅行後数年を経た後であり、おそらく臨終の年である元禄七年までかかったものと思われる」とするのが正しい見方であるといえよう。『おくのほそ道』は、紀行文とは言っても、今日的な紀行文とは少々趣を異としており、余り実際の旅と重ねすぎないように、あくまで紀行文学であるという観点を忘れてはならないと思う。

『おくのほそ道』の扱われ方が、中学校と高校とでは採録されている章段は同様であっても、内容的にはどう違っているのだろうか。高等学校の指導資料を見てみることにする。

- ・ 尚学図書「国語Ⅰ」（作品・作者・出典の解説）……東北の辺地に細々と続く道をたどり、歌枕を尋ねながら風雅の誠をせめ、詩歌の伝統をうけて「細き一筋」（柴門の辞）を貫こうとした芭蕉の心が投影されているものと言えよう。
- ・ 学校図書「国語Ⅱ」学習Aの解説……人生五十年といわれた時の四十歳は初老といわれた。肉体的条件への不安はもちろんのこと、宿舎の不備、治安衛生上の条件の悪さなど、現代では想像を絶する悪条件の中での旅は、正に死を覚悟してのものであった。そうした時代背景を考えに置いて、自由に感じたことを話し合わせたい。

ここでも、多くの教科書は、「人生を旅と考える」芭蕉の姿を追わせようとしていることがわかる。とすると、中学校と高等学校で『おくのほそ道』を学習させる意図は、一体どこにあると言えるのだろうか。中学校でも高等学校でも、同じ章段を同じねらいで指導して、どれ程の教育的効果が期待されるのか、大いに疑わしい限りである。

このように見てくると、中学生に「漂泊の思い」を『おくのほそ道』の中心として与えてゆくことに問題があると言わざるを得ない。『おくのほそ道』の目的が麻生磯次氏⁴¹の言うように「芭蕉の旅は、漂泊の思いを満足させるというところに根本の動機があった」という所に第一にあったということは否定できない。しかし、全てがそこから発してはいても、『おくのほそ道』全篇が、「漂泊の思い」しか描いていないわけではない。高校生の「国語Ⅱ」ならまだしも、中学生に「漂泊の思い」を理解させようとするれば、それこそ主体的な読みは期待できないのではなからうか。かえって、知識の上のみの平盤な読みを与えることに陥ってしまわないだろうか。現に、先の『作品別 文学教育実践史事典』で磯野武之助氏も、芭蕉が『おくのほそ道』で描こうとしたことを「平生胸の中に抱いていた風雅の世界」であるとして、

ところで、中高生達にとって、この「さび・しをり」などという観念は理解させようにもほとんど無理であろう。が、芭蕉が生涯をかけて追求した詩精神のいくつかは、作品を通じ、わからせることができよう。

と指摘している。観念を理解させることが不可能であるとするならば、敢て観念にふれずとも

『おくのほそ道』を楽しめる部分を見い出してゆけばよいのではあるまいか。では、はたして、そのような部分はあるのだろうか。芭蕉の『おくのほそ道』の旅の目的を今一度見つめ直すことによって考えてみたい。

『おくのほそ道』の旅の目的の第一は、「漂泊の思いの完成」にあったことは、先にも述べた通りである。しかし、そのみが旅の目的ではなかった。そのことは、『おくのほそ道』を読む時に得られる作品世界の広さを見ても判るであろう。『おくのほそ道』の旅の目的を、阿部喜三男氏¹⁰⁾は、次のように分けておられる。

- | | | |
|--------------|------------|-------------|
| (1) 歌枕をたづねる | (2) 自然に接する | (3) 自然よりも人事 |
| (4) 古人の心を求める | (5) 漂泊の思ひ | (6) 俳風宣傳の意識 |
| (7) 新風の追求 | (8) 人生観より | (9) 紀行文への意欲 |

という9項目に涉って、諸学の見解を整理し、旅の目的としている。限られた教材の選定のスペースの中にあつて、この(1)~(9)までの全ての旅の目的を網羅させよとは、到底実現不可能な話である。しかし、だからといって、中学校でも高等学校でも同じで良いという理屈ともならない。ここで、今一度考えるべきは、先に実践例を挙げた荒井浩氏のように、教材としての観点を立てて、出来るだけ多くの部分を教授内容として覆ってゆけるかということである。氏は、「平泉」の教材化のために試みたのであるが、以下、その10の観点を挙げてみる。

- (1) 名所を尋ね歌枕ならよけい心にとめようし、
- (2) 知らぬ土地に見聞きなれぬ風情(旅情)逸興を楽しめようし、
- (3) 往時は旅次の苦しみも多く、しかしそれでもなお風雅の道を求めあくがるころはますますつゆり、
- (4) 文学である以上、特に心打たれた風光には鏤刻の修辞を構えよう。
また、(2)とも関連して、
- (5) 土地土地の旧跡に温古の心も動き、
- (6) 俳文である以上、ときには軽みの俳味に遊び、
- (7) 俳諧の道すなわち文芸探究の場ともなり、
- (8) 随時随処に会った人物を心にとめ、筆に乗せるということになる。そして、旅の心は、
- (9) 流転の相に自己を置くことに始まり、
- (10) 変転せぬ不易の道にめぐり至って文芸にまで昇華する。

そして、氏は、46章の全段に涉って、(1)~(10)の観点から分析表を作り上げている。こうした『おくのほそ道』への視点のあて方は、大いに注目すべきであると思う。

芭蕉が『おくのほそ道』の旅に出ようとした根底には、古人の風雅の跡を訪れて、自らの俳風の深化を求めようとした姿勢があつたのは、明白である。だが、その姿勢を余りに「乞食行脚」の語にひかれて、「死を覚悟して」とか、「再びは戻れない」とかいうように悲壯感極まりないものに仕立て上げていってしまうのはどうかと思う。確かに、「古人も多く旅に死せるあり」、「もし

生きて帰らば」といった行文もあって、「前途三千里の思い」が、全く不安感を伴わないものであったとは言えない。しかし、『おくのほそ道』の旅には、堀切実氏¹⁹⁹が言うような、

“漂泊の旅”といっても、それは文字通りあてどもなくさすらい歩く乞食行脚の旅と、なんらかの目的をもちつつ遊動するノマド的な旅との両様が考えられる。そして、芭蕉の『おくのほそ道』の旅には、その両面が含まれているのである。作品の世界としては、むしろ後者にウエートがあるようにさえみえることがある。

といった性格を考えることができるのである。その上、氏は、尾形仿氏の紹介した元禄7年洛梧宛書簡も示して、「いまだ相見ぬ風雅の友との出会い、会合をなによりの楽しみとしていたわけであった」とも述べている。この指摘は、尾形仿氏自身も、角川文庫版の解説「行脚の姿勢」の中で行なっているものである²⁰⁰。

「漂泊の思いの完成」の他に、「歌枕を訪ねる」とか、「風雅の人々と出会う」とかいった目的が『おくのほそ道』の旅の目的として認め得るものならば、余り前者一辺倒に陥ることなく、より後者にねらいを置いての『おくのほそ道』の指導がなされていくことも大切なのではなかろうか。中学生にとっては、むしろ、その方が理解しやすいと言えよう。以前に、私は、もっと「白河の関」を教材とすべきであるという主張をしたことがあった²⁰¹が、それもさることながら、今回は、もっと、「風雅の友との出会い」に注目しておきたいと思う。特に、鈴木清風との交流を描いた「尾花沢」は、もっと教材とされて良いと思う。芭蕉の旅を支えてくれるものの中に、やはり「風雅の友」の存在は、「漂泊の思い」の存在同様に不可欠なものではなかろうか。みちのくに旅して、発見したものの一つに、「古代のすがた」があったことは、「白河の関」を越えての章段に見うけることができる。「平泉」もその一連に立つ段といえよう。「山刀伐峠」の旅の辛苦の後、心よりもてなしてくれる清風との出会い、そこに東北の人情を見出した旅人芭蕉の姿も、もっと強調されていって良いと考える。

「平泉」を教材として不適切だと言っているわけではなく、「平泉」の主題とする、「自然と人間」といった大きな内容や、「旅立ち」で綴られる「漂泊の思い」をいきなり中学校3年生に与えてゆく必要はないのではないかとやっているのである。『おくのほそ道』は、芭蕉がその生涯の中で最も大切にしたい旅であり、だからこそ数度の推敲を重ねたのであろう。全篇いずれを取っても優劣は付け難いのは当然である。だからこそ、教材の選定に当たっては、中学生に対して何を教えられるのかの吟味はなされるべきであろう。「自然と人間」・「永劫と流転」という構造を、しかも、漢詩文の知識さえ要求される中で、あえて中学生に教えるべきなのであろうか。

「俳諧師」という職業人であった芭蕉の姿は、それこそ文学史上無視できないはずである。元禄という時代を考える時、むしろ、旅の辛苦よりも、俳諧師なる人々の存在をこそ強調されてよいのではなかろうか。芭蕉が旅を好んだのは、「俳諧師」でありつつも、「俳諧師」から脱脚しようとするための方便であった²⁰²ことに意味があるはずである。自分の俳風の宣伝とまではゆかなくとも、東北に行くことによって、現在（元禄）に失なわれている何かをつかめる予感が芭蕉を動かしたのであろう。そこに注目してゆく時、「旅心定ま」った「白河の関」や、加右衛門と

の「宮城野」での出会いや、「旅の情」を知る清風の「尾花沢」でのもてなしなどにこそ、『おくのほそ道』の教材としての価値を見い出してゆけるように思われてならない。また、「五月雨を～」の句の推敲過程についても、「尾花沢」の「涼しさを～」の句と同様に、もっと「あいさつ句」としての役割で扱われてゆくべきであると思う。

『おくのほそ道』の旅は、「乞食行脚」といった、今日の私達の旅へのイメージとは大きくかけ離れたものであったのではなく、「古いもの」を実際に見て何かを感じ取ってみたい、同好の人と出会ってゆっくり話をしてみたい、といった今日の私達が思い立つ旅の動機付けと余り違わない旅であったという側面を考えさせることが、むしろ、中学生にはふさわしいと思う。そうした面からの教材の検討も必要な時期なのではないだろうか。

注

- (1) 国立国語研究所『国語年鑑』 秀英出版 1970年版～1991年版
国文学研究資料館『国文学年鑑』 至文堂 1985年版～1990年版
- (2) 穎原退蔵・尾形仂訳注『新訂 おくのほそ道』 (角川書店 1984) 章段名。
- (3) 国立教育研究所付属図書館・財団法人教科書研究センター編『中学校国語教科書内容索引 昭和24年度～61年度 (上) (下)』 (財)教科書研究センター 1986 上巻 p.26
- (4) 教科書検定年を示す。
- (5) 「光堂」までの部分を含まない。
- (6) 原典未調査。
- (7) 文部省『中学校国語指導書』 大日本図書 1959 pp.71～72
- (8) 文部省『中学校指導書 国語編』 東洋館出版 1970 pp.65～67
- (9) 文部省『中学校指導書 国語編』 東京書籍 1978 pp.105～106
- (10) 文部省『高等学校国語科指導資料 教材と指導』 東京電機大学出版局 1966 pp.366～367
- (11) 浜本逸純・松崎正治『作品別 文学教育実践史事典 第2集』 明治図書 1987 pp.306～317
- (12) 安井獎栄『中学校古典の授業—全国実践事例』 右文書院 1973
- (13) 太田昭臣・大西忠治編著『中学校の国語の授業2 古典と説明的文章』 あゆみ出版 1983
- (14) 宮崎健三・野地潤家・石井茂編著『古典の教え方 日記・紀行・随筆編』 右文書院 1974
- (15) 中野徹也「芭蕉って、嘘つきなんだ!!」『月刊国語教育』123 東京法令 1991.12
「『曾良旅日記』を用いた『おくのほそ道』の授業—短時間での読解をねらいながら—」
『国語教育研究 岩手』2 1990.6 初出
- (16) 井本農一『校本 芭蕉全集 第6巻』 解題 富士見書房 1989 p.44
- (17) 麻生磯次『校本 芭蕉全集 第6巻』 概説 富士見書房 1989 p.13
- (18) 阿部喜三男・久富哲雄『詳考 奥の細道 増訂版』 月栄社 1979 pp.21～24

- (19) 堀切実 「『おくのほそ道』序章の漂泊観」『國文学解釈と教材の研究』34-6 学燈社 1989.
5 pp.67～68
- (20) 穎原退蔵・尾形叅注 『新訂 おくのほそ道』 角川書店 1984 pp.282～285
- (21) 石塚修 「『奥の細道』で何を教えるのか」『紀要 第7号』グループブリコラージュ 1989.
12 pp.8～11
- (22) 桑原武夫 「第二芸術」(『世界』1946.11) 講談社学術文庫18 講談社 1980 pp.24～25